

(Q) 都市部を中心に家庭環境に恵まれない子が
増え、自分が愛情を受けているという実感に乏し
い子達が少なからずいると思うが、そういった子
達もきちんと小動物に対し愛情を注ぐことがで
きるのだろうか？飼育動物が子どものストレス
のはけ口になってしまう危険性はないのだろう
か？（しかし、心に何らかの問題を抱えた子にと
っても癒しになるような活動を行えば・・・）

(A) 身近な動物にどのように接するかは事例に
よってさまざまでしょう。ある子はストレスのは
け口には十分にはきつく当たっても動物にのめりこむように
心の平安を求めることが見られている。

米国に課題を抱えた青少年を、家畜や動物たち
と共生させ、その世話を通じて教育を行っている
グリーンチムニーという更生施設があるが、時に
は動物につらく当たっても、やはり動物がいるこ
とがその子にとって、居場所をつくり、安定をも
たらすと言われている。また動物の命を絶つ事例
があっても、その行為自体が子どもにまた新たな
刺激となり、更正への道につながる。

日本の幼稚園の事例で、受験をする5歳児が、
いつも幼稚園の大きな鶏を抱えてほおずりして
いるとの報告がある。この子は鶏を独占し他の子
に渡さないそうだが、ストレスを抱えた心のバラ
ンスを必死に保とうとしているのだと、担任は考
えて、そのことで保護者と相談しようとしている。
このように、さまざまな意味で、子どもにとって「抱
くことができる動物」は貴重だといえる。